



教育研究会

自由社出版中学校歴史教科書の問題点

9月24日午後1時半から、小出隆司さんから、表記の報告がなされました。

そのポイントは、一般に、日露戦争、十五年戦争を、自衛戦争であり、アジア解放に役だったとする論調に対する批判がなされており、それはその通りであるが、さらに「全体を通しての内容の批判的検討」が必要であるとする点でした。

さらに、天皇制についての賛美や「美しい国日本」像の注入を企図している点への批判付けが必要であり、それを実行する際、「歴史的事実を極端には歪曲せず、コラム欄を多用」といったテクニックを用いている点に注目する必要があることを強調されました。

そして、教科書全体について、とくに近代以降について、問題になる記述を一つ一つ取り上げられました。例えば、韓国併合に関して「朝鮮の鉄道・かんがい施設を作るなどの開発を行」なると、一見日本側の朝鮮への寄与を思わせる文章など、その実日本側の植民地への投資＝帝国主義的利潤の収奪であったことを隠している文章など、問題の多い記述が随所に出てきていることを指摘されました。

こうした記述全体を通してこの教科書が描き出している日本の姿は、道徳的で、慎ましやかな人々の国であり、この国に対する欧米諸国などの不当な侵略的攻撃にたいして、文字通り自衛の戦争を戦ってきたという姿であり、戦前日本が海外侵略に出ていったことへの反省は全くないのではないかという意見が出されました。

また、そうした対外侵略をめざさざるを得ない、日本国内部の「貧困」の構造（資本家、地主による国民収奪）も、描かれて

いないので、現代史における社会主義思想の意味などはまったく理解されないことになっていることといった指摘もなされました。

さらに、こうした日本美化の結果生み出されるのは、閉鎖的な排外主義的ナショナリズムであって、「グローバリゼーション」が求められている現在、新しい時代に対応できないのではないかというのが、この研究会の結論でした。

岡映研 岡映と国民融合論

9月18日、手島一雄さんの報告がありました。手島さんは、問題の所在を、1960年の部落解放同盟綱領と、1975年「国民融合論」との差異を、岡映はどのようにとらえ、対処したか、さらにいえば、岡に奈良本批判（1961）と国民融合論以後の岡の主張との整合性如何、という問題だと整理されました。

この日の検討は、まだ中間的なものであり、秋の合同研究会の報告に期待が集まっています。

春の読者会開催決まる

9月28日開催の企画編集会議で、春の読者会開催が予定されました。

読者会は、以前一度開催したことがあります。なかなか好評で、有意義な会でしたが、準備など大変で、その後見合わせていました。

しかし、読者の反響をキャッチして誌面の改善を図る上で、欠かせない企画ですので、ぜひとも開催しようと求められて来た会です。それがいよいよ実行に移されることになりました。詳細は、追ってお知らせします。